2022.2.6　年間第五主日

漁師を弟子にする

ルカによる福音　5:1-11

イエスがゲネサレト湖畔に立っておられると、神の言葉を聞こうとして、群衆がその周りに押し寄せて来た。イエスは、二そうの舟が岸にあるのを御覧になった。漁師たちは、舟から上がって網を洗っていた。そこでイエスは、そのうちの一そうであるシモンの持ち舟に乗り、岸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして、腰を下ろして舟から群衆に教え始められた。話し終わったとき、シモンに、「沖に漕ぎ出して網を降ろし、漁をしなさい」と言われた。シモンは、「先生、わたしたちは、夜通し苦労しましたが、何もとれませんでした。しかし、お言葉ですから、網を降ろしてみましょう」と答えた。そして、漁師たちがそのとおりにすると、おびただしい魚がかかり、網が破れそうになった。そこで、もう一そうの舟にいる仲間に合図して、来て手を貸してくれるように頼んだ。彼らは来て、二そうの舟を魚でいっぱいにしたので、舟は沈みそうになった。これを見たシモン・ペトロは、イエスの足もとにひれ伏して、「主よ、わたしから離れてください。わたしは罪深い者なのです」と言った。とれた魚にシモンも一緒にいた者も皆驚いたからである。シモンの仲間、ゼベダイの子のヤコブもヨハネも同様だった。すると、イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。

説教

わたしたちは「どこからきて、どこに行く」のか、ことば遣いは違うかもしれませんが誰もが一度は考えたことのある問いではないでしょうか。

シモンことペテロにとってはイエスとの出会いでこの問いは解決しました。

イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間をとる

漁師になる。」そこで、彼らは舟を陸に引き上げ、すべてを捨ててイエスに従った。
ルカ 5:11

シモンはガリラヤの漁師の子として産まれ、イエスとの出会いで魚ではなく人をとる漁師とされました。「どこから来てどこへ行くのか」かの答え（＝人をとる漁師）がイエスによって与えられました。きょうの福音はシモンの身の上におきた出来事、シモンの人生を劇的変えたイエスとの出会いが記録されています。

ところで「漁師を弟子にする」というタイトルにしましたが、「大漁の奇跡」というタイトルのほうがきょうの福音箇所からすればよいのかもしれません。

「漁師を弟子にする」ほうのエピソードはマタイ 4:18-、マルコ 1:16-にもあります。しかしそこには大漁の奇跡の記述はありません。イエスはただ「人間をとる漁師にしよう」と声をかけただけでペテロたちはイエスに従い弟子になりました。

「大漁の奇跡」はルカ福音書とヨハネ福音書が伝えています。奇跡の内容はいっしょですが物語の背景はおおきく異なります。

ヨハネ福音書ではイエスの処刑後、意気消沈した弟子たちは故郷のガリラヤ湖に戻りもとの漁師となります。そこにふたたび復活イエスがあらわれ、いわれるままに網を打ったところ魚がたくさんかかり、イエスといっしょに魚を焼いて食べたという物語です。ヨハネでの「大漁の奇跡」は復活イエスの顕現物語として、また順番としては福音書の一番最後です。

その一方でルカ福音書の大漁物語は最初のエピソードです。シモンことペトロは「大漁の奇跡」によりイエスを信じて弟子になりイエスの本格的な福音宣教がはじまります。このようにヨハネとルカでは順序がまるで逆になっています。

敬愛するテオフィロさま、わたしもすべての事を初めから詳しく調べていますので、順序正しく書いてあなたに献呈するのがよい思いました。ルカ 1:3

ルカは福音書の序文にこう書いていますが、ここでいう「順序正しく」というのは時間的な歴史的な順序というのではなく、ルカの考える順序、言い方を変えると「救いの順序」に従って書いたということでしょうか。
イエスの誕生から始まり、イスラエルでの福音宣教、十字架刑での死、そして復活昇天までが第一部（ルカ福音書）そして第二部（使徒言行録）が弟子たちによるエルサレム教会の発展、そしてローマから世界に拡がるキリストの教え＝救い発展の順序で書いたということでしょう。時間的な順番ではなく、ルカの解釈する神の意思、目的にそった経緯で福音書を記したのだ考えます。だから大漁の奇跡はガリラヤ宣教のはじめの出来事で、奇跡を目の当たりにした漁師シモンが悔い改めてイエスの弟子となり輝かしいキリスト教の第一歩が踏み出された、というエピソードとして編集記録されたのでしょう。

さて、冒頭で「どこから来て…」と問いかけましたが、わたしたちはルカのキリスト教物語（救いの順序）とはべつに、聖書のことばのなかから「どこから来て…」をみつけることもできます。

> **主の御使いが荒れ野の泉のほとり、シュル街道に沿う泉のほとりで彼女と出会って言った。「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか。」「女主人サライのもとから逃げているところです」と答えると、主の御使いは言った。「女主人のもとに帰り、従順に仕えなさい。」**創世記 16:7-9
>
> ちょっと解説すると、ハガルはサラ（サライ）の命令でアブラハムの子を妊娠しますが、ハガルが妊娠とわかるとサラがハガルをいじめます。いじめられたハガルはサラから逃げ出します。この引用箇所「サライの女奴隷ハガルよ。あなたはどこから来て、どこへ行こうとしているのか。」はそのときの天使とハガルのやり取りです。その後ハガルは天使の言いつけ通りにサラの処にもどり、やがてイシュマエルを出産します。しかしその後サラはアブラハムの子（イサク）を産み、結局ハガルはイシュマエルともども追放されます。イシュマエルはアラブ人の祖先と信じられています。

> **風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ**

行くかを知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。ヨハネ 3:8

イエスとユダヤ人議員のニコデモの宗教的な会話の一部

イエスは答えて言われた。「たとえわたしが自分について証しをするとしても、その証しは真実である。自分がどこから来たのか、そしてどこへ行くのか、わたしは知っているからだ。しかし、あなたたちは、わたしがどこから来てどこへ行くのか、知らない。ヨハネ 8:14

イエスとファリサイ派の論争の一部

シモンは網を捨てイエスに従いました。たとえわたしたちが「どこから来たのか、そしてどこへ行くのか」を知らなくてもシモンのようにイエスに従うことができますように、そして神のゆたかな祝福がわたしたちにありますように。わたしたちに道を指し示してくださる主にあって、信仰を力強く保つことができますように。